身近な雑かん木(9)　ニワトコ

NPO 法人自然観察大学　岩瀬　徹

林の周囲や原野の周辺，ときには人家の近くの空き地などに生えるスイカズラ科（新しい分類ではレンプクソウ科とされる）の落葉低木ないし小高木。高さは２～３ｍときには５～６ｍに達する。

冬芽は枝に対生して比較的大きく，芽鱗に包まれる。葉芽は卵形，花芽は球形である。この花芽は大きく，展開すると葉と花が混じるので混芽ともよばれる。春早く芽吹きをする様子が目立つ。

枝は湾曲して長くのび，樹皮は灰褐色から黒褐色，縦にひび割れる。茎の髄の部分は軟らかくて大きく，顕微鏡観察の材料をこの髄に挟んで切片を作った。葉は対生し，大形の奇数羽状複葉，小葉は３～５対，縁に細かい鋸歯がある。

花期は３～４月。新しい枝の先に円錐状の花序をつける。花序には多数の小さい花が集まる。花冠は黄白色で先は５裂する。雄しべは５個，雌しべは１個で柱頭は３裂する。果実は球形の核果（内果皮が堅くなって種子を包む）で，６～７月ごろ赤く熟す。まれに黄色に熟す品種がありキミノニワトコという。

同属のソクズ（クサニワトコ）は大形の多年草で，林縁や空き地などに群生する。葉はニワトコに似た大形の奇数羽状複葉で対生する。夏に，茎の先に白い小花に密集した花序をつける。

ニワトコの漢名は接骨木（精確にはトウニワトコのことという）といい，茎や葉を煎じたものが骨折や傷に効くとされた。ニワトコの語源には諸説があるが，植物語源研究家の深津正氏は，古い時代はミヤツコギ（宮仕う木？）といい，それがミヤトコやニワトコに転訛したと推論している。

写真 -1　ニワトコの樹皮

写真 -2　春早く芽吹く

写真 -3　葉は大きな羽状複葉

写真 -4　花序をつけた枝

写真 -5　晩春には果実になる

写真 -6　ソクズ（クサニワトコ）